

第三号：第十五首～第十八首

前回に引き続き第三号を順にみていきたい。第七首から第十四首までをひとかたまりとして水のろ過の喩えが用いられていたことはすでに述べたが、その一連の歌におけるもう一つのキーワードは「しんのはしら」である。「親神が心から急いでいるのは『しんのはしら』を早く入れたい」(三号8)、しかし「この柱を入れようと思っても、水が濁っていてその場所が分からない」(三号9)と述べて、水こしで泥水をろ過する目的は「しんのはしら」を入れることにあると説いている。

この「しんのはしら」とは何を意味しているのであろうか。建築の用語としては大黒柱のようにその建物の中心になる柱であるが、『注釈』によればさらに3つの意味を含んでいる。一つは精神的な芯なるものの象徴として心の芯・中心思想を意味する。また一つには「真柱」という信仰者の中心に立つ人物を意味し、さらには「甘露台」という人間創造の地点(「ぢば」)を標識する台・柱を意味している。このように「おふでさき」は一つの言葉に3つの位相(場面)での意味を持たせており、本稿のように「おふでさき」を解釈する論考ではその多義的な側面の一つひとつを吟味する労を要するのであるが、「おふでさき」をそのまま和歌の形式で読むと、一つの言葉に幾重にも重ねられた象徴や意味が異なる位相を相互に移動し合っただイナミックに展開していくことを付言しておきたい。

さて、第三号は、泥水のような心が澄んで「しんのはしら」がしっかり入れた(定まった)ならばこの世界に治まりが実現する(三号13)と説いているが、その手立ては先に記したように3つの位相で果たされていく。まず、精神的なレベルにおいて「しんのはしら」を入れるとは、この信仰に確固たる信念を持つことと言えるが、それは突きつめれば心が澄むということと同義である。そして、その心を澄ます方策として、この一連の歌では水のろ過の喩えを用いて親神の教えをよく聞き、その論しをしっかりと悟るようにとのことであった。

次いで、信仰者の中心に立つ人物としての「しんのはしら」(「真柱」)を入れるとは、明治7年当時においては中山みきの外孫である梶本眞之亮を中山家に迎え入れて「ぢば」に定住させることを意味している。梶本眞之亮はみきの三女である梶本はるの三男であり、第三号が執筆された年の6年後の明治13年(眞之亮15歳)に梶本家から中山家に養子に入り、後に初代真柱として信仰的・教团的な芯になる人物である。みきは、娘はるが眞之亮を懐妊している頃から「今度、おはるには、前川の父の魂を宿し込んだ。しんばしらの眞之亮やで」と述べており、出生以前から眞之亮を中山家に迎え入れる親神の意図を伝えていた。

そして、最後に「しんのはしら」を「甘露台」として入れる場合では、人間創造の地点である「ぢば」に「甘露台」を据えて執り行われる「かんろうだいのつとめ」「かぐらづとめ」の完成への望みが表明されている。この「つとめ」の完成を促される親神の思いは第一号からすでに述べられており、「おふでさき」全号を通して一貫して強く示されている。

したがって、これらのことから第八首の「親神が心から急いでいるのは『しんのはしら』を早く入れたい」という親神の望

みの内実とは、人々が精神の面では心を澄まして親神への信念を確立し、実生活の面では真柱を中心としてことをすすめ、そして、その結実として「甘露台」を中心として「かぐらづとめ」をつとめてほしい、と解することができる。

そして、「おふでさき」はさらに一本伏線を引いて、一見別々の事柄を示しているようなこれらの3つの位相が実はもう一つ深い次元では一つになることを示すために、次の一首より断続的にこれまでより意味を深化させた歌を登場させている。つまり、「この世の人間を創めた元の神を誰も知っている者はいないだろう」(三号15)、「泥海の中より親神が守護してきて、それがだんだんと現在にまで続いてきた」(三号16)と、この世界と人間の根源について言及している「元初りの話」を徐々に明かし始めているのだ。先に伏線といったのは、「にごりの水」という喩えが人々に心の反省を求める際の心のあり様を示しているのみならず、この世の始源の状態を表した「泥海」を示唆しており、「元初りの話」を導入する役目を果たしていると考えられるからである。

この「元初りの話」の詳細は第六号まで待たなければならないが、その話の特徴の一つは親神しか知り得ない内容を人間に伝えようとしている点にある。それは言わば、海を見たことも泳いだこともない人に海を伝えるようなものであり、海を経験した人にとって「海を伝える」という作業はただ単にその経験を言葉で述べるのみならず、未経験者を浜辺に連れていき実際に海に触れさせ泳がせることまで含むだろう。なぜなら、どれだけ言葉を尽くしても海を経験そのものを記述し尽くすことは不可能だからであり、言葉の体系では覆い尽くせないほどこの世界は「大きい」からである。

しかし、この「元初りの話」は親神しか知り得ない内容の記述であるが、「海を経験」とは異なる。なぜなら、それは言葉以前の出来事という意味で記述不可能なものの記述であり、それは世界より「大きい」から記述不可能なのではなく、世界に「無い」から記述不可能なのである。したがって、「元初りの話」はこの世界に流通している尺度からすれば往々にして不合理であり、意味をなしていない。そこで親神はこの世界以前の「無い」世界について人間に伝えるために、「元初りの話」としてその内容を記すだけではなく、海を伝えるときに浜辺に連れていき泳がせるように、人々に「元初りの話」を経験させようとしている。言い換えれば、「元初りの話」には「何を」伝えるのかという内容的な側面と、「いかにして」伝えるのかという遂行的な側面があり、後者は立教以来中山みきの生活を通してなされている。

そして、このようなみきを通してなされる「元初りの話」(元の理)は異なる角度で表現すれば「たすけ」の遂行と呼ぶことができ、続く歌で端的に示されている。すなわち、「この度『たすけ一条』を教えるのも、これもない事をはじめかけることである」(三号17)、「今までにない事をはじめかけるのは元を創った神であるから」(三号18)と述べて、「無い」世界を創めたことと同じ働きで、この世に未だ「無い」陽気な世界を実現すると説いている。